

追悼

J. C. Fuggle 教授を悼む

東京大学理学部 藤森 淳

1991年12月16日夜、Prof. John C. Fuggleは、数年間にわたる闘病の後に、ナイメゲン大学病院で息を引き取りました。享年45歳という若さでした。

Prof. Fuggleは、光電子分光、逆光電子分光、軟X線分光を用いた固体の電子状態の研究で数々の優れた業績をあげるとともに、ヨーロッパ放射光学会の会長を務め、放射光、電子分光に関連した数々の国際会議、ワークショップ、スクールを組織するなど、オーガナイザーとしても活躍されました。

英国に生まれ、1968年ヨーク大学化学科を卒業したのち、1971年に同大学でPh. Dの学位を得て、ストラスクライド大学博士研究員、ミュンヘン工科大学助手を経て、ユーリッヒ原子力研究所・固体物理学研究部門ではProf. M. Campagnaのもとで、X線光電子分光(XPS)とX線逆光電子分光(BIS)を用いた表面吸着子の研究や遷移金属合金、希土類化合物の研究を組織し、持ち前の馬力で目ざましい成果をあげていきました。いずれの場合にも、スペクトルに現れる電子相関の効果にいち早く注目し、固体内の電子相関を調べる手段として電子分光を発展させてきました。とくに、Dr. O. Gunnarsson (マックス・プランク研)・Prof. K. Schönhammer (ハンブルグ大)の理論グループと共同で行った。価数揺動Ce化合物のf電子状態の解明は、当時の希土類価数揺動物質の研究のブレイクスルーとなったもので、その後の高エネルギー分光による(d電子系も含めた)強相関電子系の研究の隆盛につながったものと言えま

す。1984年にオランダのナイメゲン大学に教授として招かれてからは、放射光を用いた高分解能軟X線分光による電子状態の研究を精力的に推し進め、古くからの実験手段である軟X線分光を、吸収端付近構造(XANES)の定量的な解析を通じて、遷移金属化合物、希土類化合物の電子状態を調べる有効な手段として確立してきました。

しかし、ナイメゲンに移った頃から、彼の筋肉は不治の病に冒されはじめました。快方に向かった時期もあり、1990年の秋には山田財団の招きで7週間来日されたときには、仙台-東京-岡崎-大阪、そして岐阜での物理学会の特別講演と、日本全国を忙しく駆け回っていました。1991年の秋に私がナイメゲンを訪れた時には、入退院を繰り返していた頃で、定期的に病室を訪れるポストクや学生に仕事の指示を与えていました。

Prof. Fuggleは、私たちが抱いているイギリス人の一般的なイメージ(ゆとりを持って生活を楽しむ、保守的、等)とは異なり、仕事至上主義で、時には好戦的とも見えるほど積極的に議論を挑んでいくこともありました。「のんびりやっていて健康でいるよりは、病気になってもいいから全力で仕事をしたい。」と語っていたのが、彼の性格をよく表しています。学間に対する態度は厳格で、その鋭い物理洞察力と研究に対する情熱は、強く印象に残っています。放射光科学、高エネルギー分光の発展のきなかに、優れた指導者を失ったことは悔やまれてなりません。心からご冥福をお祈りします。